

# ハス(蓮)

ハス(蓮)は古い歴史を持つ植物で、被子植物の誕生する白亜紀(約1億年前)に繁茂していたことが化石の出土で分かっています。

ハスの花であるレンゲ(蓮華)は水面から高い位置に花を咲かせ、中央には円すい形の花托があります。食用となる地下茎のレンコン(蓮根)のほか、茎や葉、実など全て薬用に用いられます。

また、泥の中から美しい花を咲かせる姿は、極楽浄土の花としても尊ばれてきました。2,000年以上の歳月を経て発芽した「大賀蓮」もあるように、ふしぎな生命力は、ハスの魅力の一つです。



## 花ハス生産日本一の歴史

厳しい転作政策の中で、米作に代わる農業生産の重要性を認識されていた堂宮区(故岩崎義雄さんが、県農産園芸課で特産担当であったこともあり、水田の水を抜かなくても栽培ができる切り花用のハスを、亡くなった戦友たちの慰霊の気持ちも込めて作り始めたそうです。南条地区が地質や気象条件に適しており、非常に品質のよい花ハスが収穫されたことから周辺の農家に呼びかけて生産を開始。特産物振興のリーダーとなり、花ハス生産の発展の基礎を築きました。昭和49年、自宅の10aの水田で試作から始めたハス栽培は、昭和51年には栽培面積15haに達し、生産農家15軒で全国生産の65%を数えるという日本一の出荷量を誇る時期もありました。品種は「誠蓮」で花弁は約120枚あります。7月の新盆用は関東方面に、8月の旧盆用は関西方面に出荷されています。

## 特産の花ハス栽培を支える 南条蓮生産組合長 井上典宣さん

「大型特殊自動車を運転するのが好きで18歳の頃からトラクターに乗っていました。」と話される井上典宣さん(堂宮)は、父の(故)井上静さんと一緒に25歳の時から花ハス栽培をはじめられました。

50歳で会社を辞めてから専業で農業を営み、平成25年からは南条蓮生産組合の組合長(2代目)を務めています。生産農家が7軒にまで減少するなか、担い手がなくなった田んぼを引き受け、8haの田んぼを管理しています。田んぼの深みは効率が悪く、田起こしだけでも250時間以上も費やすそうです。

土壌改良、獣害対策、人手の確保などに悩まされながらも、収穫機械の導入による収穫の効率化や選花場の再整備などに前向きに取り組まれています。



井上典宣さん 35歳の頃 (上段左から3人目)

農家の高齢化が進む中、後継者である長男の哲宏さんも昨年からは収穫機械を運転しています。哲宏さんは「父の後も絶やさず続けていきたいです。」と力強く話し、「若い組合員が増えて、コミュニケーションを形成できるのが理想です。」と微笑まれました。



収穫機械を運転する井上哲宏さん(写真左)

# 人かがやき 花ささみだれる 安らぎの郷・南条

## 収穫から出荷まで

7月9日、井上典宣さんの田んぼと選花場には、親せきや知り合いなど27人が集まりました。収穫作業が、早朝3時から始まり、選別、包装など一つ一つ手作業で花が痛まないよう丁寧に箱詰めされました。農家7軒分の箱詰めされた花ハス約18,000本は、組合でまとめられて関東方面へ出荷されました。

